発表 No.実 10　　**実践発表**

書くことが好きな生徒の育成を目指して
―母語で読み書きができない生徒への日本語指導と多読の実践から―

中村夏帆・宇都宮由佳　（　岩倉市立南部中学校　）

１．本校の日本語指導が必要な生徒の実態

本校には、日本語指導が必要な生徒が 48 名在籍している。以前は中南米からの日系人子弟が占めていたが、現在はアジアにルーツをもつ生徒の方が多い。特にパキスタンやネパールから来日する生徒が増加している。それらの国では英語で教育が行われているため、母語の文字は理解できない。しかし、学習内容が理解できるほどの英語能力はなく、日記が書ける程度である。

2020 年度より、本校では、全生徒にタブレット端末が配布されている。生徒たちは、インターネットの翻訳機能を使いこなしながら、学習に参加している。特に、授業の終わりに学習のまとめを書くとき、タブレット端末に母語で打ち込み、それを日本語に翻訳して書く姿が見かけられる。しかし、パキスタンやネパールから来日した生徒は、母語でも、英語でも書けないので、「〇〇がわかった」という感想になる。このような現状から、日本語指導を担当する教師の間で、母語で読み書きができない生徒への指導の難しさが課題になっている。特に、書くことを嫌う傾向があることに課題意識をもっており、書くことが好きになるための実践をすることにした。

２．実践について

2.1 対象生徒について

中学 1 年生の女子生徒 A を例にして述べる。A は小学 4 年生の 1 月にパキスタンから来日した。母国の小学校では英語で教育を受けたため、母語のウルドゥー語で読み書きはできない。中学校入学直後に英語で自己紹介を書く活動をすると、「Halo. I 〇〇（名前）. I 」と書いて、手が止まってしまった。英語で「ダンスが好き」の書き方が分からなかったからだ。現在も一番得意な教科は英語であるが、「私は買い物に行きます」という日本文に合わせて英語の語順を変えて書く問題に「to go I shopping」と答える程度であり、英語ができるとは言い難い。

2.2 実践の目標

中学校に入学した 4 月、新入生歓迎会の感想や授業のまとめ等、何かを書かなければならない機会は多々あったが、その多くを A は何も書かずに過ぎていった。筆者がどうしようかと悩んでいた 5 月、校外学習で知った級友の良いところをカードに書いて本人に渡すという学級活動があった。筆者が A の隣に行き、活動の説明をしたり、参加を促したりしたが、「何で書く？めんどうくさい」「『ありがとう』を言う人がない」と言って、書こうとしなかった。しかし、級友から A への感謝を書いたカードをもらうと、とても喜び、筆者らに日本語を確認しながら丁寧に返事を書いて渡した。このことから、SNS で動画や写真を見ることはあるが、文字から情報を得たり、自分から伝えたりした経験が A にはないことに気付いた。このことから、日本語指導では、探究を通して考えたことを相手に伝える活動から書く意義を知ることを目標にした。また、文字に親しむこと、文字で伝えることの楽しさを経験することを目標に多読を始めた。

2.3 具体的な実施の内容とその過程

日本語指導では、まず、社会の学びで資料を多く提示して、自分で考えたり発見したりして、伝えたいと言う思いをもつことを意識した。次に、書くことができれば、伝えたいことを記録し

て残すことができること、そこにいない人にも伝えられることを、実際に経験しながら習得できるようにした。同時に、国語の説明文で文章構成や接続詞の使い方を、物語文では文学的な表現方法を知ることにより、効果的な伝え方の技術について考える機会を多くもつようにした。

多読の実践は、前述した生徒の実態や教師の課題意識から今年度より始めた。粟野他（2012）を参考に「やさしいレベルから読む・辞書を引かないで読む・わからないところは飛ばして読む・進まなくなったら、他の本を読む」をルールとし、読書記録用紙に日付、題名、内容、５段階の評価を書くこととした。月に１回程度、お気に入りの本を選び、読書アルバムの作成をした。

以下に、A が書くことが好きになっていく過程を記述した。

①文字への親しみ

５月 18 日『羊飼いの男の子～イソップ物語より』を読み、読書記録に７文程度の内容を書いた。これまでは「〇〇がありました。」という１文の記録が多かったので快挙だった。母国で勉強したことがある本があって嬉しかったからいつもよりたくさん書いたのだという。「（読書記録を）これからもっと書く。私できる」と話し、その後は内容を５文程度書けるようになった。

②書くことへの慣れ

５月 29 日学年の取り組み。良好な人間関係についての講義を聞いて、A4 サイズの用紙いっぱいに感想を書いた。これまでは、一語一語、教師に確認しながら書いていたが、一人で感想が書けた。これまでに 20 冊ほどの読書記録を作成し、内容をまとめて記述することに慣れたようだ。

③書くことで、伝えたいことを伝えた経験

６月 23 日総合的な学習の時間「福祉実践教室」。当日までに、車椅子について新聞にまとめ、さらにパワーポイントを作成してプレゼンテーションするという課題が出された。多読で『車いすの犬 花子と』と『さっちゃんのまほうのて』を丁寧に読み、主人公のことを自分ごととして考える経験をした。その後、車椅子について自ら学びを深め、新聞とパワーポイントに書いてまとめた。自ら調べたことを効果的に発表するためには原稿を書いた方が良いと自分で判断し、原稿用紙２枚程度の長文であったが書き上げた。４名のグループ中で一番良い発表に選ばれた。

④主体的に工夫して書く

10 月日本語指導で子ども・家庭庁のパブリックコメントを書いた。日本語教室でもっと勉強したいこと、パキスタンの学校を作ってほしいことを、A4 サイズの用紙 18 行にまとめた。「初め・中・終わり」といった文章構成や接続詞の使い方を工夫して、意欲的に自分の意見を書いた。

３．結果と考察

多読の授業で出会った本によって、母国と日本の勉強がつながった時、A は初めて自発的に書いた。これ以降、行事がある度に用紙いっぱいに感想を書くようになり、文字に親しみ、書くことに慣れてきたことがわかる。また、日本語指導では教科を通して同級生と学びを深め、書いて伝える活動をすることで、効果的に伝えられるようになった。その結果、在籍学級の中でも、自分が伝えたいことを書くことで伝えられ、また、伝えたことが評価される経験をした。この経験を通して、主体的に工夫して書くことができるようになり、書くことを楽しむ姿が見られるようになった。これらの結果から、文字に親しみ、書くことに慣れ、伝えたいことを伝えられたという経験をすると、書くことが好きな生徒が育成できると分かった。現在、A は内緒の手紙を友だちに書いたり、行事後の学級活動では、10 名ほどの級友に、級友の良いところや感謝を書いたカードを嬉しそうに渡したりと、書くことを楽しむ姿が見られるようになった。

【引用文献】粟野真紀子他編（2012）『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版